兵庫教育大学　研究紀要　第34巻　2009年２月　pp.111－122

インドネシア・バリ島における学校の発生と展開，構造に関する研究(2)[1)]
小学校に関する史料調査・ヒアリング調査・フィールド調査

Research on the Establishment, the Transformation and the Structure of School in Bali Island, Indonesia (2)
Historical Articles Survey, Hearing Survey and Field Survey on Modern Elementary School

中　岡　義　介*　　川　西　光　子**　　I.G.P.Wirawan***　　Son Jang Ho****
NAKAOKA Yoshisuke　KAWANISHI Mitsuko

Bali Island is one of the typical regions where people have been successful in establishing the modernized life by means of international tourism development. And they have been also successful in sustaining their traditional characteristics by the same means. It is expected, in Bali Island, that both the education for modernization and the education for sustainable tradition are accepted in their school education.

Three kinds of surveys were held in order to clarify the establishment and the transformation of modern elementary school in Bali Island; 1）literature survey from viewpoint of review for historical articles on Dutch East India, 2）hearing survey on the establishment and transformation of a first modern elementary school, or secolah desa, in Bali Island, 3）field survey on the relationship between elementary school and local community from viewpoint of spatial conditions.

キーワード：バリ島，近代的小学校，設立レヴュー，変容，空間実態
Key words：Bali Island, modern elementary school, review of establishment, transformation, spatial condition

１．バリ島における学校の発生
１-０　はじめに

バリ島（正式にはインドネシア共和国バリ州）は，1920～30年頃から観光地として世界に知られるようになった。そこでは，観光化によって生活の近代化がすすめられるとともに，観光化によって地域に根ざした伝統的生活が持続生成されるというように，近代化と伝統持続という一般に相反するとされる二つの事柄が同時にすすめられている。

このことは，東南アジアをはじめとする伝統的生活が色濃く繰り広げられている地域において，近代化をいかにすすめていくかという共通の課題に対する，一つのモデルを提示しているととらえることができる。

それがいかにしてつくりあげられてきたのか。それがいかなる仕組みをもつのか。それを解明することは，これからの世界の地域の発展を考えるとき，きわめて重要なこととして浮かび上がってくる。

近代化の中で，住民の生活に目を向ければ，近代的教育が取り上げられることは，ほとんど例外がないといってよいほどである。そうした近代的教育がいかに用意されてきたかということは，観光化と生活近代化・伝統持続との関係をみる場合の重要な論点の一つである。その重要な対象の一つとして，バリ島の経験がある。

さて，バリ島が位置するインドネシア共和国（以下，インドネシア）は，よく知られているように，オランダの植民地であった。そして，インドネシアにおける学校制度が宗主国オランダによって整備され，バリ島にも導入されたことも，よく知られている。したがって，バリ島における学校の発生はオランダの植民地政策によるものとされる。たしかに，このことに間違いはない。しかし，だからといって，学校がオランダ植民地政府の力のみによって生まれたことを意味するのではないであろう。

ところが，インドネシアそしてバリ島に関する歴史資料を概観するとき，このことを直接的に明らかにしてくれる史資料を見出すことは，難しいようである。

とすれば，上記のことを明らかにするためには，新たな史資料の発掘を試みることも重要ではあるが，既存の歴史資料を今一度，整理し直すことが行われてよいであろう。なぜならば，個々の歴史的事項の諸関係の中に，学校の発生に関する知見を見出しうるとも考えられるか

＊兵庫教育大学（自然・生活教育学系）　＊＊大阪教育大学・畿央大学非常勤講師　＊＊＊ウダヤナ大学副学長（インドネシア）
＊＊＊＊大邱教育大学助教授（韓国）
平成20年10月24日受理

らである。

かかる観点から，ここでは，バリ島における学校の発生を解明するべく，現在のインドネシアに当たるオランダ領東インドに関する歴史資料を取り上げ，それを整理し直す作業を行うことにする。

整理の視点は，以下に示すとおりである。

まず，オランダ領東インドの統治は，直接的には，オランダ本国政府とオランダ植民地政府が行っていた。これはオランダ領東インドに関する歴史資料として欠かせないものである。そこで，この動きを取り上げる。

次に，植民地にやってきた宗主国等の人々は，バダヴィア（現在のジャカルタ）などの現地（主として都市）に植民地社会をつくりだした。したがって，この動きを取り上げる。

さらに，オランダによる植民地支配を受けて，バリ島社会はさまざまに揺れ動いた。したがって，バリ島の現地社会はオランダ領東インドに関する歴史資料として欠かせないものである。そこで，この動きを取り上げる。

加えて，バリ島研究もさまざまに行われているが，これらがバリ島の植民地統治に一定の役割を果たしてきたのではないかと考えられるので，バリ島研究（ジャワ研究を含む）の動向を取り上げる。

以上のことから，ここで取り上げる歴史資料は，

1）オランダ領東インド研究の動向
2）オランダ政府・植民地政府の動向
3）植民地社会の動向
4）学校の開設
5）バリ島現地社会の動向

である。

歴史資料を取り上げる歴史期間は，バリ島がヒンドゥー化する時期およびオランダが東インドと関わり始める段階から，インドネシア共和国として独立するまでとする。

一方，ここで扱う歴史資料は，バリ島（ジャワを含む）に関する既往研究は外国語文献をくわえればすでにかなりのものを数えることができるから，既往研究で明らかにされている歴史的事項－したがって二次資料－を用いることにする。そのさい，外国語文献はここでは省略し，それらの成果が用いられている日本語文献を用いることとした。また，一般書として公刊されていない研究報に掲載された文献もここでは省略し，それらの知見が用いられている日本語文献を用いることとした。その結果，ここで取り上げた文献は，

1）石井米雄監修，インドネシアの事典，同朋舎，1991年
2）永淵康之，バリ島，講談社現代新書，1998年
3）吉田禎吾，バリ島民，弘文社，平成4年

である。

1-1　歴史的事項の抽出と整理

ここで抽出した歴史的事項は，1343年から1950年までに係るものである。その総数は100項目であり，うちオランダ領東インド研究の動向に関する事項が12項目，オランダ政府・植民地政府の動向に関する事項が31項目，植民地社会の動向に関する事項が18項目，学校の開設に関する事項が18項目，バリ島現地社会の動向に関する事項が21項目である。（データは割愛）

1-2　学校の発生について

1-1で整理された歴史的事項を，学校を中心に取り出し，各項目の関連を検討し，その結果を示したものが，図1-1である。

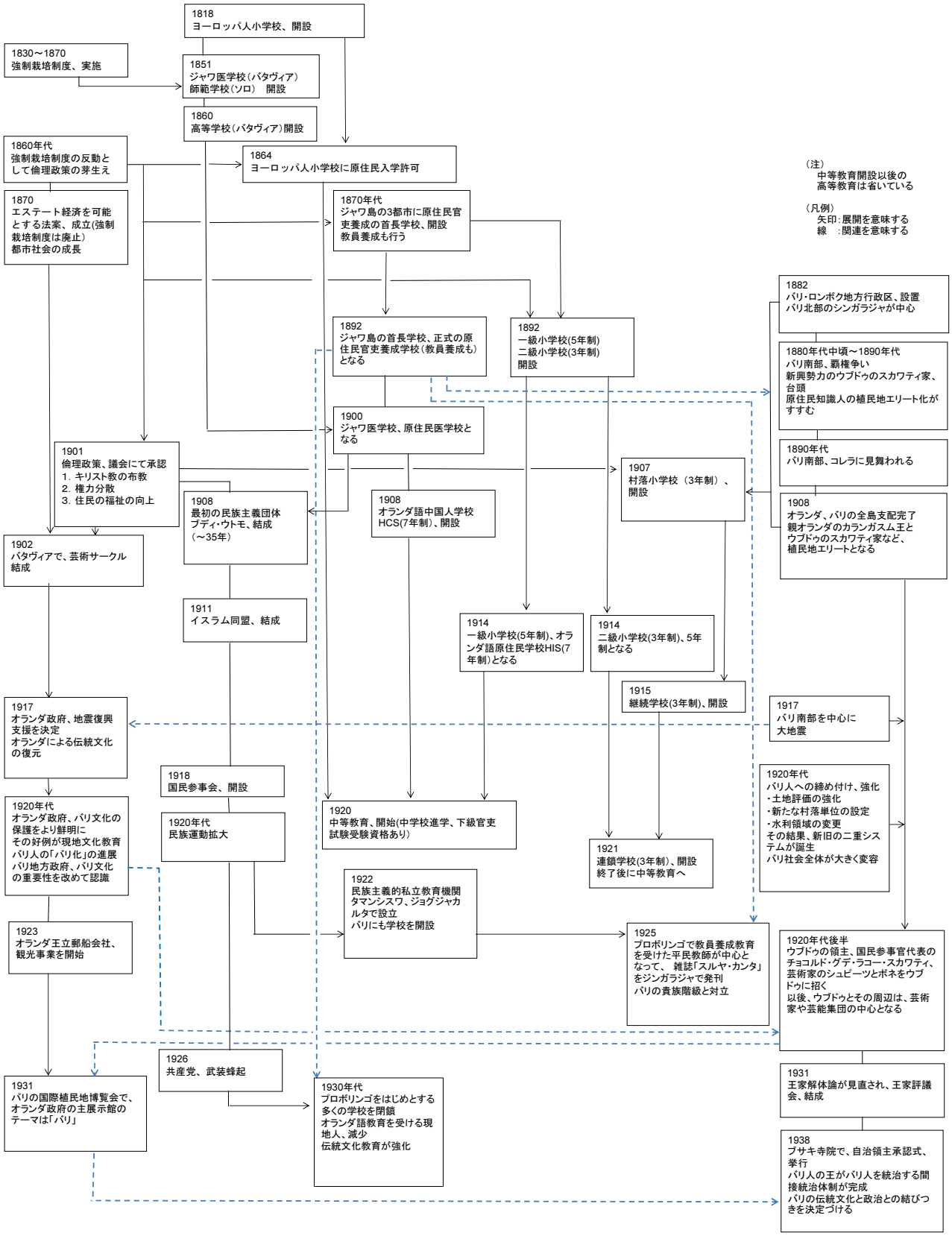
これをみると，学校の発生について，次のことが指摘される。

1）まず植民者のための学校が開設されている。具体的には，ヨーロッパ人小学校の開設であり，ジャワ医学校の開設である。
2）植民地の定住化がすすむにつれて，これらの学校への原住民の入学が許可されるようになる。
3）さらに定住化がすすむにつれて，原住民のための学校が開設されている。具体的には，原住民官吏養成（教員養成を含む）学校の開設であり，一級小学校（5年制）と二級小学校（3年制）の開設である。
4）その次に村落学校（3年制）が開設されている。
5）この村落学校の開設には，植民地本国の政策が大きく関与している。それは，具体的には，倫理政策と呼ばれた文明化政策あるいは近代化政策である。
6）しかし，それだけではなく，バリ島の現地社会の社会的状況も大きくかかわっている。具体的には，覇権をめぐってあちこちで戦争が常態化していて社会が混乱していたし，疫病が流行って社会が混乱していた。一方で，オランダの植民地政策の変更によりバリ社会へのオランダ介入が始まり，そのことによってバリ社会に新しい秩序が生まれつつあった。そして，その機会に乗じて親オランダの植民地エリートが誕生し，彼らがバリ社会に台頭してきた。
7）中等教育で，これらの3つの動きが統合されている。

バリ島でもっとも一般的な小学校である村落学校をみると，小学校の開設にあたって，

8）現地社会がかなり混乱している時期に設置されていること，ただしその混乱は新しい時代の誕生につながっているということ，
9）そこに政府（この場合は植民地本国政府と植民地政府）が小学校設置を構想していること，
10）現地社会の混乱の中にも，それを受け入れて推進する人材，リーダー（この場合は植民地エリートの親植民地政府の人材）が存在すること，

図1-1　学校の開設に焦点化した歴史的事項とその関連



がわかる。

すなわち，

1．小学校設置の契機は，社会が次なる時代に向けて混乱しているということ，

2．小学校設置の構想者は，政府と現地人エリートであるということ，

3．小学校設置の推進者は，現地人エリートであるということ，

が指摘される。

2．村落学校SEKOLAH DESAの設立と展開 ― 現SEKOLAH DASAR No.1 DI WONGAYA GEDEの場合

2-0　はじめに

オランダ領東インド（現インドネシア共和国）に原住民を対象とした村落学校SEKOLAH DESA（3年制）が導入されたのが1907年である。その村落学校がバリ島ではじめて設置されたのは，1916年，タバナン県Tabananウォンガヤ・グデ村Desa Wongaya Gedeとされる[2]。もっとも原住民を主たる対象とした小学校が導入されたのは，これが最初ではない。1892年にはすでに一級小学校（5年制）および二級小学校（3年制）がオランダ領東インドに開設されている。このうち一級小学校は1914年にオランダ語原住民学校（7年制）に改組されているから，厳密には二級小学校だけということになる。これらの小学校の利用状況を1944年の在学生徒数からみると，村落学校は1,895,374人，この村落学校から進学する継続学校（3年制）は287,126人，二級小学校は2,759人，一級小学校を改組したオランダ語原住民学校は72,514人である[3]から，村落学校は地域に細やかに配置された学校であるといってよい。

そこで，ウォンガヤ・グデ村の村落学校を取り上げ，ヒアリングによって収集しえたその設立と展開に関する事項を明らかにする。調査時期は2007年7月である。

2-1　ウォンガヤ・グデ村の概要

ウォンガヤ・グデ村は，バリ州の州都デンパサールDenpasarの北北西，東西に走ってバリ島を南北に区切る山系のなかほど，バリ島第3位の標高2,276メートルをもつバトゥカウ山Gunung Batu Kauの南側の原生林の中，もっとも上流（山の方向）に位置する村である。村のさらに上流には，バリの六大寺院の一つに数えられるバトゥカウ寺院Pura Luhur Batu Kauが位置する。（図2-1）

バリ島の南部がもっとも開けている現在では，ここには基本的に南からアクセスすることになる。その限りでは，ウォンガヤ・グデ村はバリ島の中心デンパサールから遠く離れた，辺鄙な山奥の村である。しかし，ウォンガヤ・グデ村に村落学校ができた頃は，島の北海岸，ブレレン港BulelengがあるシンガラジャSingarajaが島の中心であった。このブレレン（シンガラジャ）とデンパサールを結ぶ数少ない山越えの南北道路が少し東を走っているが，この道路とウォンガヤ・グデ村は渓谷が始まる直前の山肌，したがってバトゥカウ山の頂上にかなり近いところを縫うようにして繋がれている。したがって，この南北道路がそのころにすでに機能していたとすれば，村落学校ができたころは，デンパサールに比べれば，その中心地であるシンガラジャに比較的に近いところにあったということになる。そのためかなり早い時期にこのウォンガヤ・グデ村に村落学校ができたとしても，決して不思議ではない。

ウォンガヤ・グデ村は，バトゥカウ山が頂上2,276メートルから800メートルあたりまで急速に標高を下げ，そこから先はしばらくのあいだ比較的に緩やかな傾斜の山肌を広げる標高700メートルから600メートルの，一つのちょっとした尾根筋に展開する（図2-2）。ロンタールというヤシの葉に書かれた古文書に，ウォンガヤ・グデ村は8世紀にあったことが記されているという。その真偽は別として，村の起源はかなり古いとみてよい。

この尾根筋に一本の道路を開き，その両側に家々を配しているから，街村の形態となっている。村の骨格となる尾根道は車が2台すれ違うことができる分だけアスファルトで舗装され，道の両端は90センチほど地道のまま残され，道と屋敷の境には結構大きく深い排水路が掘られている。アスファルト舗装はもう長いあいだ補修されていないようで，穴だらけである。（図2-3）

村の屋敷地は尾根道の両側に隙間なく設けられているが，村の屋敷地はここだけに限られ，村は不用意に広がってはいない。その周りに農地が開かれているが，急傾斜地を開いてつくられた美しい棚田が続き，ここの主産業が農業それも灌漑米作であることを示している。こうし

図2-1　ウォンガヤ・グデ村の位置

た景観から，村管理と水管理がいかにしっかりとなされているかを推し量ることができる。(図2-4)

この尾根道の上流つまり山の方向を望めば，山の霧が晴れておれば，真正面に，バトゥカウ山が大きくそびえたつ。人々は一年中バトゥカウ山を見て暮らすことになる。そのなかほどに，東を走る先述の南北道路から引き込まれた道が直角にクロスする。このクロスポイントあたりに，村の集まり場などの施設がもうけられている。つまり，このあたりが村内の，そして村と外の世界との交流の場所となっている。

村落学校設立のころは，ここに20〜30家族（人口は不明）が住んでいたが，バトゥカウ山を正面に見る尾根道は今よりもっと狭く，家々も現在のようにその両側に隙間なく建っているのではなく，両側に家が点在するという状態であった。家々も，現在のような赤い砂岩をふんだんに用いて壁をつくり，白い砂岩の彫刻をつくり込むような赤瓦屋根の家ではなく，木造の家であった。その面影はジヌンjinengと呼ばれる米倉にわずかにみることができる。

2-2　建設の発起と建設

学校建設を発起したのは，カパラ・デサkepala desaと呼ばれる村の慣習的側面をつかさどる長老イー・グデ・プルドッI Gede Peredである。

一度村外に出た当時のエリートたちが，これからは小学校が必要だ，と言い出した。一般の人々のほとんどは計算ができたり文字が読めたりはしない。それでも，収入は少ないから，お金を払ってまで学校に行かねばならないとは思っていなかった。その村人たちをイー・グデ・プルドッが説得したのである。

ここに学校開設に至る経緯のひとつの側面をみることができる。それは，一般の村人が率先して学校の開設を求めたということではなく，村のリーダー的存在の人々が開設を推進した，ということである。そして，村のリーダーたちとは，いわゆる植民地エリートと呼ばれる，オランダ植民地政府にかかわってきた人たちである，ということである。つまり，村における学校の開設には，学校制度をつくる側とそれに賛同して現地で推進する側の両者が認められるのである。

さて，学校をどこに建設するか。農地をつぶすわけにはいかない。それに，農地は居住エリアのそばにあると

図2-2　ウォンガヤ・グデ村の全景
（上が北の方向）

図2-3　ウォンガヤ・グデ村の尾根道から
（左）山の方向の景観(先はバトゥカウ山)
（右）海の方向の景観

図2-4　ウォンガヤ・グデ村近くの棚田

いうわけでは決してない。したがって，それは，当然，尾根道沿いのどこかということになる。尾根道沿いの土地は村の所有地で，それを村民に屋敷地として世襲的に貸すという方式をとる。屋敷地は原則として村の所有だが，個人が使う屋敷地を取り上げてまでして，学校建設にあてることはできない。

尾根道沿いには，村の寺院など村が共同して使う土地がある。その多くはすでに寺院などで占められているが，その一部に，広っぱとなっているところがある。そこが，選ばれた。

ウォンガヤ・グデ村の広っぱは，クロスポイントの一角，西南の角にある。この村の共同利用地である広っぱに，ゴトン・ロヨンgotong royongと呼ばれる自発的助け合い方式で，学校は建設されることとなった。当時の学校の建物の姿はよくわからないが，建築資材の竹や草などは村人たちが持ち寄り，共同作業で，草葺き竹造，土間床の校舎を完成させたというから，竹を建物の骨組みにした掘立建物ではなかったかと思われる。そして，黒板も作った。

ここに村における学校開設の可能性の高さを見出すことができる。それは，村には慣習的に古くから共同利用地がかならずといってよいほどにあり，学校開設の場所を見出しやすかったということである。加えて，建築資材も，他所から調達することはほとんどなく，村の周囲から得ることができたということである。言い換えれば，その当時の住居をはじめとする一般的な建物の造り方と同じであり，その意味で学校をつくるからといって，特別の技術も材料も要らなかったということである。さらに，ゴトン・ロヨンという助け合い作業が伝統的にあったことが開設を容易ならしめたということである。さらにいえば，近代的学校の開設にあたって，ハードについてはすべからく現地方式を採用したということである。

2-3　学校教育

最初の10年間は，3年生まで，ここで勉強した。4年生と5年生は別の村，ペルバー村（不明）の学校へ通った。生徒は学齢期の子どもばかりではなく，年長者も学校に通った。

学習内容は，読み方，ブヒトンと呼ばれる九九などの計算を中心とした算数，そして歌である。簡単な教科書があった。筆記用具は石板とロウ石を用いた。歌は。古いバリの歌，マレー語の歌－これはオランダ政府の指示による，スマトラやパダンの歌，村で作った歌などで，景色や自然などを歌ったものが多くを占めた。村の儀式の歌などは学校で教えることはなかった。

授業は午前中のみで，家に帰ってからは，子どもたちは皆，田植え，稲刈り，牛のえさ用の草刈りなど，半ば義務的に働いた。これが小学校の学齢の子どもたちのごくふつうの生活であった。

これらのことから，村落学校での教育は，まずは文字が読めることと計算とくに暗算ができること，次に歌であることに特徴があることを読み取ることができる。前者は伝統的な九九を用いたりしてはいるものの，いわゆる近代的教育の範疇にはいるものであり，後者はその内容をみれば，地域に密着したものとみてよいであろう。この時期，オランダの植民地であったことを考えれば，後者は植民地統治の一つの方法として導入されたのではないかと考えられる。

ちなみに，村における学校制度は，1945年まではこの村落学校SEKOLAH DESA方式，1945～1965年は国民学校ESOLAH RAKYAT方式，1965年以降は基礎学校SEKOLAH DASAR方式である。当時の学習内容がそうであったかどうかは不明であるが，1944年以前の指導要領は，CBSA=Cara Belajar Siswa Aktif（Way, to Study, Pupil, Active）と呼ばれるもので，子どもたちがアクティブに学習する－考え，討論し，答えを出す－という趣旨であった。

2-4　学校運営

教師の給料はオランダの植民地政府から支給され，学費はそれぞれの家庭が負担したが，教育にはそれ以外にいろいろなものが必要になってくる。そうした学校に必要なものは生徒の家庭から集めて当時のカントールと呼ばれる役所に納め，そこから小学校へまわした。そして，

図2-5　旧ウォンガヤ・グデ村落学校
（現 SEKOLAH DASAR No.1 DI WONGAYA GEDE）

村の人々が何やかやと世話を焼いてくれたが，これは現在も続いている。

教師は，当初は教師資格を持ったものはほとんどいなかった。資格を持った教師が赴任するようになったのは，開設後10年ほど経ってからである。教師は1校だけの専従ではなく，複数校をかけもった。

2-5　学校建築の変化

1916年に建てられた学校の建物は，1930年にまず建て替えられた。草葺き竹造，土間の校舎は波板トタン屋根木造，セメント床に変わった。1965年には法律の改正により現在の小学校SEKOLAH DASAR No.1 DI WONGAYA GEDEとなり，1975年頃から少しずつ整備されて，現在のような形となった。校舎は6教室と職員室など，校庭にはバレーボール兼用のバトミントンコートが一面もうけられている。カベーkabéと呼ばれる家族計画プログラムにより子供数が減少し，児童数減に伴う学校の統廃合，学級数の縮小が行われた結果，同2番小学校は5年ほど前になくなり，ウォンガヤ・グデ村には現在この1番小学校だけがある。小学校としては教室と職員室，そしてわずかばかりのコートだけでは決して十分ではないが，これが州政府の考え方でもあり，また現実問題としても拡張のための土地がない。(図2-5)

ちなみに，1970年代，スハルト大統領時代に，オランダの大学に留学した経験を持つマスリー文部大臣が，オランダ方式をベースにそれにアメリカ方式を加味した小学校整備を推進した。その結果，バリ島では，まったくへんぴな場所の村落にも小学校が設置されるようになり，小学校教員も配置され，教員宿舎も完備されるようになった。その半面，現在，小学校の敷地，校舎いずれも，どこも同じようなものとなっている。

3．国際観光地ウブドゥ村における小学校の空間実態調査

3-0　はじめに

地域の伝統的生活に根ざした観光地として知られるバリ島のなかで，ウブドゥUbudはその核と位置づけられてきた。ウブドゥでは，バリの伝統的な音楽や踊りをはじめとするさまざまな技芸が日夜，そこここで繰り広げられ，それがウブドゥをして国際観光地バリ島の核と位置づけさせてきたのである。

ウブドゥのこうした地位はしぜんに生まれたのではない。植民地政府がバリ文化に大きな関心を寄せ，それを基盤にして間接統治体制がつくられたことと，1880年代中頃からウブドゥが位置する北ギアニャールGianyarに新興勢力として台頭してきたチョコルド・グデ・スカワティが植民地政府と深くかかわっていたこととがあいまって，チョコルド・グデ・スカワティの故郷ウブドゥが国際観光地として発展することになったのである。

ウブドゥでは，現在，このような国際観光地化の進展によって，一方では生活の近代化がすすみ，他方では地域文化がより強化されていくというように，生活の近代化と地域文化の持続的，生成的発展がバランスを保っておこなわれている。

そうした地域で，どのような学校教育がおこなわれているのであろうか。つまり，学校教育において近代化の推進と地域文化の継承という相反する事柄とされることをいかにしてすすめているか，というテーマを見出すことができる。

ここでは，かかる観点に立ち，国際観光地ウブドゥの中でもとくにそれがすすめられてきた狭義のウブドゥつまりウブドゥ村Desa Ubudを取り上げ，そこでいかなる学校教育が行われているか，それを空間的側面からみることにする。すなわち，学校が地域の中にいかに位置づけられているかを取り上げる。彼らが生活する空間は彼らの生活が物的に反映されたものであり，したがってその空間をみることによって学校と地域とのかかわりを知ることができるからである。

具体的な調査項目は，

1）小学校の空間的立地環境

2）学校敷地の利用状況

である。調査時期は，2007年7月と9月である。

3-1　ウブドゥ村の空間構成

ウブドゥ村における学校の配置を理解するためには，ウブドゥ村の空間構成を知る必要がある。そして，そのためには，ウブドゥ村が位置する自然地形をみなければならない。

このあたりは，島の中央を東西に走る火山がつくりだす山系の南側の山すそにあたり，山肌は雨水に浸食されて，北から南にかけて幾筋もの渓谷をつくりだしている。その結果，幅の狭い尾根筋と谷筋が交互に走る地形となっている。とりわけウブドゥ村があるあたりは，その間隔がかなり狭くなっている。人々はこの尾根筋の部分に生活の場を求めるから，生活の場は北（山の方向）から南（海の方向）へ線状に形成されることになる。

ウブドゥ村の場合，まずタペス川Tukad（以下Tk.）Tapesとジュンジュンガン川Tk. Jungjunganに挟まれた一筋の尾根に一本の道を通し，その両側に村の居住地を開いた。その道がスウェタ通りJl. Suwetaとワナラ・ワナ通りJl.. Wanara Wana（通称モンキー・フォーレスト通り）である。これにクロスする形で走る東西路のラヤ・ウブドゥ通りJl. Raya Ubudとのクロスポイントから北（山の方向）がスウェタ通り，南（海の方向）がワナラ・ワナ通りである。これに沿って形成された集住地はバンジャールbanjarと呼ばれる地区（日本の部落に近い）を形成する。スウェタ通りとワナラ・ワナ通りには，北から順にジュンジュンガンJungjungan，ブントゥユン

図3-1　ウブドゥ村の自然地形と道路網

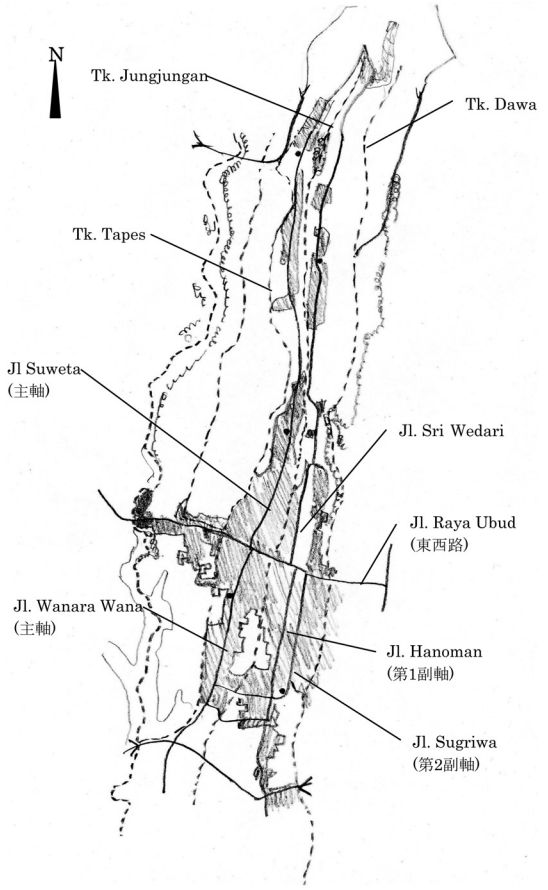
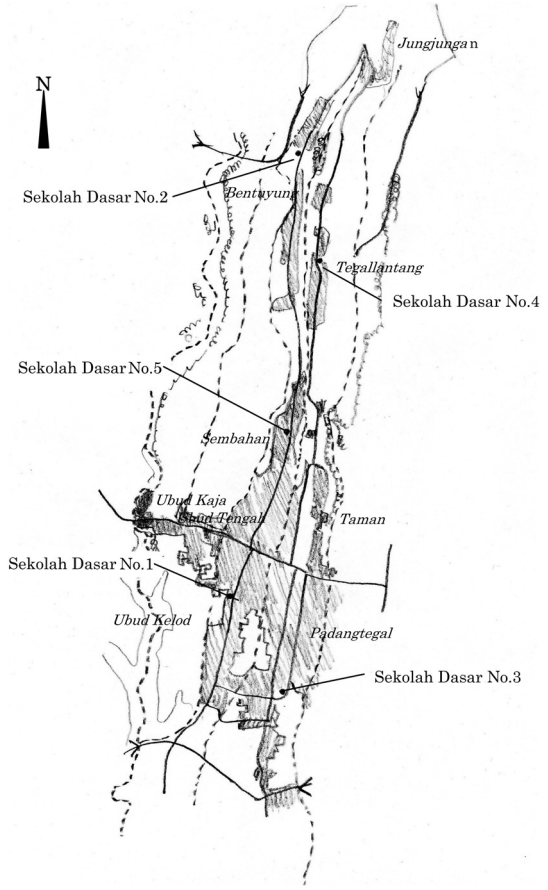


図3-2　ウブドゥ村における小学校の分布



Bentuyung，スンバーンSembahan，ウブドゥ・カジャUbud Kaja，ウブドゥ・テンガーUbud Tengah，ウブドゥ・クロッドUbud Kelodのバンジャールがある。このうちスンバーンとウブドゥ・カジャ，ウブドゥ・テンガー，ウブドゥ・クロッドは現在ほとんど連担している。

この東側，ジュンジュンガン川とダワ川Tk. Dawa（東西路のラヤ・ウブドゥ通りから南はブンブンガン川Tk. Bengbengan）の間にはもう一つの尾根道が開かれている。東西路のラヤ・ウブドゥ通りの北側がスリ・デワリ通り，南側がハノマン通りJl. Hanomanで，スリ・デワリ通りに北から順にテガランタンTegallantang，タマン・カジャTaman Kaja，タマン・クロッドTaman Kelod，ハノマン通りに北から順にパダンテガル・カジャPadangtegal Kaja，パダンテガル・テンガーPadangtegal Tengah，パダンテガル・ムカルサリPadangtegal Mekarsari，パダンテガル・クロッドPadangtegal Kelodのバンジャールがある。そして，ここにはもう一本の尾根道スグリワ通りJl. Sugriwaがさらに東側に開かれ，計2本の尾根道ができている。

これらの生活の場の中で，前者の尾根道の部分が最初にでき，村の発展とともに後者の尾根道部分ができていったと考えるのが一般的である。つまり，前者がウブドゥ村の主軸で，後者が副軸をなすと考えることができる。主軸は一本だが，副軸は必要に応じて複数あらわれる。それを形成想定順に第1副軸，第2副軸などと称することにする。ウブドゥ村のように，もともと人々の日常生活の場であった主軸が観光地化されていくと，生活の場は第1副軸，第2副軸を形成することによって副軸に移動していき，全体として生活の場は副軸の形成によって広がっていくことになる。

これが，ウブドゥ村の自然地形と道路，社会組織からみた基本的な空間構成である。東西路のラヤ・ウブドゥ通りは，このような南北路の尾根道とは異なり，基本的に尾根道相互を結びつけるものである。

以上を示したものが，図3-1である。

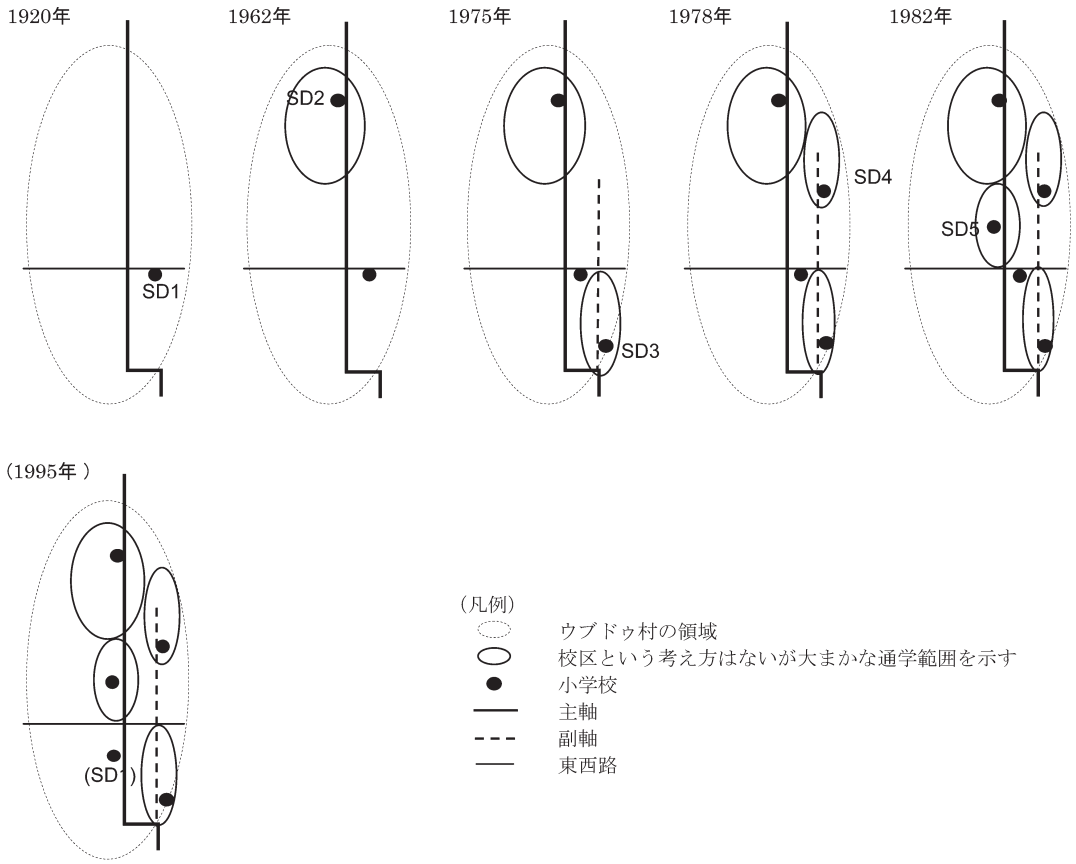
3-2　小学校の分布

このような空間構成をもつウブドゥ村には，1番小学校Sekolah Dasar No.1から5番小学校Sekolah Dasar No. 5までの5校の公立小学校Sekolah Dasar Negri（教育省所轄の小学校）が設置されている（図3-2）。それらのうち3校が主軸に，2校が副軸に位置する。

これらは，図3-3に模式的に示すような順で開設されている。

① 1920年に現在の一番小学校がいわゆるクロスポイントの東方に開設された。開設時は村落学校であり，これがウブドゥ村で唯一の小学校であった。当時，ウブ

図3-3　小学校の開設プロセス



ドゥ村自体は，現在のように観光地化されて大きく広がることなく，ごく一般的な尾根道の村であったと考えてよいであろう。その状況がかなり長い間続く。

② 村落小学校の開設から40年以上経った1962年に，主軸のかなり北部に新たに2番小学校が開設された。

③ その後，15年近くが経ったのちに，副軸に3番小学校と4番小学校がそれぞれ1975年と1978年に開設された。副軸の居住がかなりすすんだためであろう。これで，主軸と副軸にそれぞれ小学校が開設されたことになる。

④ さらに，1982年に，1番小学校の通学者を分割して，主軸に5番小学校が開設された。

⑤ 1995年に1番小学校が主軸上の現在地に移転した。

3-3　小学校の空間特性

① 1番小学校Sekolah Dasar Negri No.1（立地図及び空間構成図は省略）

ウブドゥ村で最初に開設された小学校で，当初は村落学校（3年制）であった。もともとは東西路の東方にあり，ウブドゥ村全域を対象にした小学校であったが，1995年に現在地に移転した。2007年7月現在，生徒数は608人，教師数23人（うち名誉教師4人），18学級（1学年3学級×6学年）である。

生徒たちの通学エリアはおおまかに，75%が大バンジャール・ウブドゥ内，25%がそれ以外である。生徒の家庭の職業はツーリズム関係70%，農業5%，公務員20%である。

1番小学校は，国際観光地ウブドゥ村の核にあたるところに位置する。主軸の南北路と東西路とのクロスポイントには，東北に元王宮，西北にワンティラン（もともとは闘鶏場であるが今は技芸場），東南に市場，西南に広場（現在は公共施設地）があるが，そのクロスポイントから主軸を南に350メートルほど下ったところの西側に，1995年に移転された。その東側にはかなり広いオープンスペースがあり，オープンスペースの南側にバンジャール・ウブドゥ・クロッドUbud Kelodの集会場であるバレ・バンジャールBale Banjarが2006年につくられた。小学校の前の主軸はウブドゥ村のメインストリートで，小学校の四周は，すべて観光関連施設で，その真っ只中にある。ただ，観光関連施設の多くは住居の屋敷や建物を一部改変してつくられたもので，外見は観光関連施設だが，一歩中に入れば住居での日常の生活が行われている場合がきわめて多い。

一番小学校の校地は狭く，平屋建て校舎が2棟，2階建て校舎が2棟建っており，グランドに相当するものはまったくない。正門を入ったところのわずかのスペースを利用して国旗掲揚場がもうけられており，ここで毎週

月曜1時間目に朝礼が行われる。校舎の背後，校地のもっとも奥まったところに生徒用トイレ，ワルンwarungと呼ばれる購買施設，生徒用休憩所がある。購買施設には軽食やスナックなどが用意されており，朝食が家で用意されることが少ない生徒たちはここを日常的に利用している。校地の南，道路に面した一角はLPD（Lembaga Perkreditan Desa）と呼ばれる村のクレジット・エージェンシーの事務所がもうけられている。

② 2番小学校Sekolah Dasar Negri No2

2番小学校は，国民学校Sesolah Rakyatの時代である1962年に，ウブドゥ村で二番目に開設された小学校である。主軸の北端に近いブントゥユンに位置する。2007年7月現在，生徒数は117人，教師数9人，6学級（1学年1学級×6学年），校地面積22アールである。

生徒たちの通学エリアはおおまかに，90%が小学校のあるブントゥユンから，10%が少し上に位置するジュンジュンガンからである。生徒の家庭の職業は農業40%，それ以外は観光関係従事者である。

軸道に沿って住居敷地がならび，その中に数軒の雑貨を扱うワルン（小店）があるだけという典型的な伝統的農村で，軸道から川に降りる（川に水浴場がある）小道がつけられた角に，バンジャールの集会所が設けられ，そこに小さな小店ワルンが2軒と少し大きいワルンが1軒，そして2番小学校がある。このワルンは，子どもたちの簡単な食事場となっている。小学校の南側はちょっとしたオープンスペースになっており，その少し下に墓地と死者の寺プラ・ダルムがある。死者の寺のワンティラン（もともと闘鶏場）ではジュゴグという竹のガムランの上演が観光用に行われている。この一帯はバンジャールの所有で，学校もその一部を用いて建てられている。（図3-4）

校地には，小学校の平屋建て校舎2棟と平屋建て職員室1棟以外に，平屋建て幼稚園，そして平屋建てLPDの事務所がもうけられ，これらに囲まれた中庭には，国旗掲揚場がもうけられ，バトミントン・コートや池もつくられている。（図3-5）

③ 3番小学校Sekolah Dasar Negri No3（立地図及び空間構成図は省略）

3番小学校は，1975年に，副軸の南端に近いパダンテガル・クロッドに開設された。この副軸を構成するパダンテガル・カジャ，パダンテガル・テンガー，パダンテガル・ムカルサリ，パダンテガル・カジャからなる大バンジャール・パダンテガルからの生徒が主として通学している。1バンジャールにはおよそ150家族が住んでいる。

2007年7月現在，生徒数は320人，教師数14人，12学級（1学年2学級×6学年）である。生徒の家庭の職業は，農業従事，商業経営，教員を含む公務員である。

1番小学校が位置する主軸とは大きく異なり，この第2副軸は，東西路から中に入っていくにしたがい，観光関連施設は少なくなり，次第に地域の人々の生活の場となっていく。3番小学校が位置するあたりは，まったくといっていいほど地域の生活の場となっている。

図3-4　2番小学校の立地

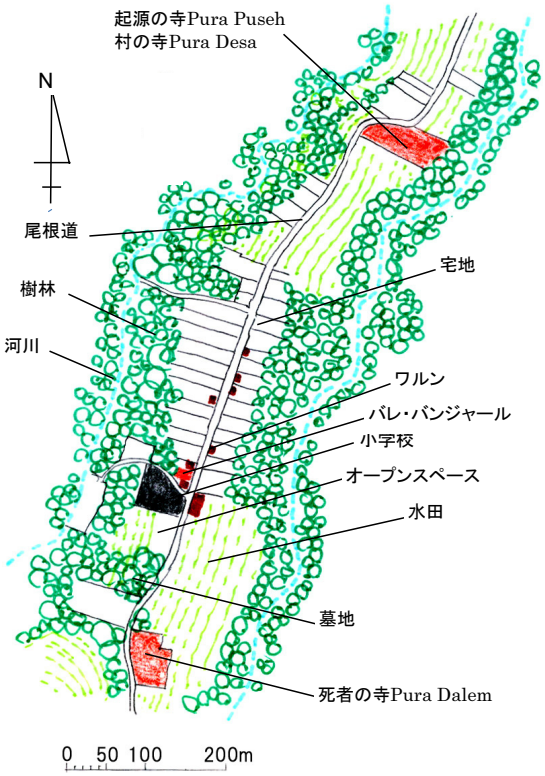
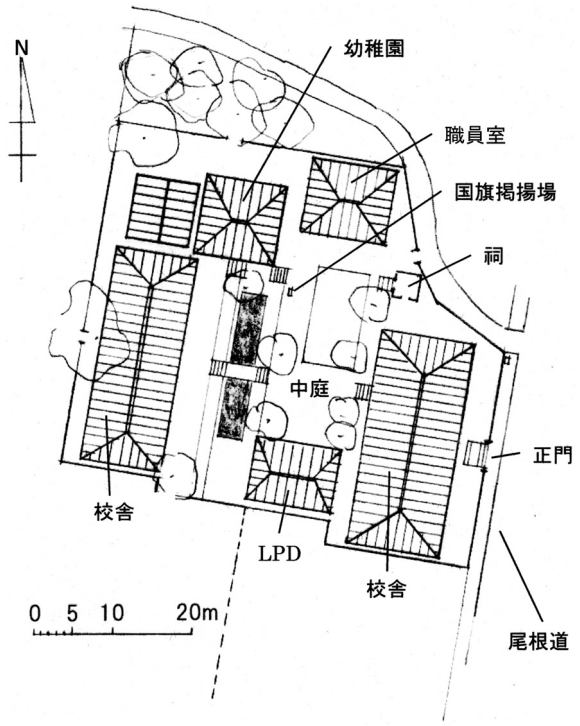


図3-5　2番小学校の空間構成



住居が立ち並ぶ地域生活の場のなかで，学校のあたりには，地域居住者向けの店や小店ワルンが集まっている。ワルンは生徒たちに軽食を提供している。これらの店は，住居敷地の道路に面した敷際部分を少し改造してつくられている。したがって，店の奥には住居が広がっており，連なる店のところどころに住居への入り口が開かれている。

校地は狭小で，平屋建ての校舎4棟と平屋建て付属舎1棟が所狭しと建ち並び，校舎の1棟は平仮名のくの字型建物とするなど，狭い校地での建物建設手法をとっている。建物間の空地は通路程度しかないが，その一部を多少広くして国旗掲揚場としている。生徒用トイレは校舎の背後，校地の奥にある。道路に面する校舎の一部はカントールkantorと呼ばれる公共事務所に使われており，ただでさえも手狭な学校をいっそう狭くしている。

④　4番小学校Sekolah Dasar Negri No4（立地図及び空間構成図は省略）

4番小学校は，第2副軸に3番小学校が作られた3年後の1978年に，第1副軸上，東西路から北（山の方向）に上がっていったテガランタンに開設されている。テガランタンとその少し上にあるジュンジュンガンからの生徒が主として通学している。2007年7月現在，生徒数は131人，教師数8人（男性6人，女性2人），6学級（1学年1学級×6学年）である。生徒の家庭の職業は，おおむね農業である。

テガランタンは典型的な農村で，小学校が位置する一角は村の中で死者の寺プラ・ダルムPura Dalemと墓地がおかれるところである。そこには一般に行祭事用に広いオープンスペースが設けられているが，ここでも同様に広いオープンスペースがあり，サッカーゴールが常に置かれていて日常はサッカー場などとして使用されている。小学校はそのオープンスペースの一部を利用して建設されている。さらに，LPDの事務所も小学校の近くに設けられている。学校敷地に隣接して，小店ワルンがつくられ，生徒たちがそこを利用している。

校地には，平屋建て校舎2棟とロータリークラブから寄贈された平屋建て図書館が，小さな中庭を囲んで建てられている。レンガを敷き詰めた中庭には花壇風に植栽が施され，国旗掲揚場がもうけられている。生徒用トイレは校地の南にある。

⑤　5番小学校Sekolah Dasar Negri No5（立地図及び空間構成図は省略）

主軸上に1982年に開設された小学校で，それまでは1番小学校に通っていたが，そこから分離してここに通学するようになったものである。2007年7月現在，生徒数は137人で，教員数は8人（うち一人は英語教師），1学年1学級の6クラスである。生徒たちはスンバーン，ウブドゥ・カジャ，ウブドゥ・テンガーの各バンジャールから通ってくる。各バンジャールの居住者は，それぞれ144家族，200家族以上，140家族ほどであり，70%が農業従事者，残る30%が観光関連従事者あるいは公務員である。

クロスポイントあたりのウブドゥ・テンガーから北に連坦するウブドゥ・カジャ，それにさらに連坦するスンバーンの集住地がほぼ途切れ，農地が主軸沿いに広がろうとするあたり，主軸から少し中に入ったところに小学校はあり，道路を挟んで集会所バレ・バンジャール・スンバーンがある。主軸にはワルンや店がけっこうあるが，そこから学校側に入った路地にもワルンが一軒ある。このワルンが生徒たちにもっとも利用されているようである。この近くには高等学校もある。

校地には，すべて平屋建ての校舎が3棟，小さな中庭を囲んで建てられている。中庭はタイルで舗装され，ところどころに花壇風の植栽スペースがとられている。

3-4　空間実態からみた地域と学校とのかかわり

ウブドゥ村に開設されている5つの小学校の空間実態を見ると，次のような共通点を見出すことができる。

まず，地域における小学校の立地について。

① 村を構成する下部の社会組織であるバンジャールが一つ以上あつまって小学校が設置されている。

② 小学校の建設場所は，バンジャールが所有する土地が使用されている。

③ バンジャールが所有する土地のうち，プラ・ダルムという死者の寺の一角が使用されていることがある。

④ プラ・ダラムには，墓地を兼ねた，火葬儀礼のための空地（これをオープンスペースと呼ぶ）が備えられており，この一部が小学校の建設用地に当てられている，と考えられる。

⑤ 学校の周りには，店やワルンと呼ばれる小店が立地しており，地域の中で生活利便施設が集まる場所となっている。さらに，LPDと呼ばれる村のクレジット・エージェンシーの事務所が，おおむね，小学校の敷地に隣接，あるいは小学校の敷地の中に設けられている。

⑥ それらの生活利便施設の一つに，生徒たちが日々利用するワルンが必ず設けられる。これが，特に朝食を家でとることが少ない生徒たちの食事の場となっている。

次に，小学校の敷地利用について。

⑦ 小学校の敷地はおおむね25アール程度であり，決して広くはない。

⑧ したがって，建物が敷地のほとんどを占めている。

⑨ 建物以外の利用としては，グランド（運動場）にあたるものがなく，あったとしてもバトミントン・コート（ダブルス用6.1×13.4m）がある程度であり，通路，中庭としての利用が一般的である。

さらに，建物機能について。

⑩　敷地内には，小学校だけがある場合と，その他の施設がある場合との2種類がある。
⑪　複合利用の場合は，小学校，幼稚園，LPD（村のクレジット・エージェンシー）事務所である。
⑫　生徒たちに軽食を提供するワルンや食堂がもうけられている。

これらのことから，空間実態からみた地域と学校のかかわりとして，
(1) 小学校敷地は，現在も継続する慣習的（行政的も含む）社会組織が儀礼などのためのものとして伝統的に所有，共有する土地であり，当初から地域の中に取り込まれている存在であること，
(2) もともとは教育機能のみであったこと，
(3) 近年，社会組織にかかる新たな機能が併設されるようになっていること，
(4) 集会場バンジャールなどの村の共同施設や，地域住民が利用する店や小店ワルンが小学校のまわりにあり，地域生活の1つの核となっていること，
をあげることができる。

（注）
1）この研究は，地域における学校の発生と展開，構造に関する一連の研究の一部で，
・中岡義介・川西光子，京都・番組小学校に関する研究（1）番組小学校の設立にかかる資料の編年化，兵庫教育大学研究紀要第31巻，101-116頁，2007年9月
・中岡義介・川西光子・前中孝文，京都・番組小学校に関する研究（2）番組小学校の変遷にかかる資料の編年化，兵庫教育大学研究紀要第32巻，81-90頁，2008年2月
・インドネシア・バリ島の小学校の発生と展開，構造に関する研究(1) 国際観光地ウブドゥ村における小学校の教育実態―カリキュラムを中心に，兵庫教育大学研究紀要第33巻，81-90頁，2008年9月
に続くものである。
2）2007年7月12日に実施した同小学校元校長へのヒアリングによる。ただし，これよりも早く設置された村落学校がある可能性もあるが，バリ島の中ではかなり早い時期に設置された学校であるとみてよいであろう。
3）石井米雄監修，インドネシアの事典，同朋舎，1991，489頁。